

【一】

- 問一 知識問題。対義語は定型や韻律を持たない普通の文章、「散文」である。
- 問二 文末を名詞で終える表現技法をいう。
- 問三 「実用書」とは、作り方や習い方などの実用技術が書かれた本のことである。すなわちその本を読むことで「泣く」「笑う」などのあらかじめ想定される感情が、読むことによって促されるような本のことを言っているのである。そのことを字数に会うように説明しよう。
- 問四 傍線部の前々段落、前段落に若者は「驚異」を求める感覚が増大するということが書かれている。そこから考え、字数に合うように説明しよう。
- 問五 文学史の問題。消去法で考えていこう。
- 問六 直前に答えが書いてある。
- 問七 空欄の前に書かれている「世界や他者や歴史への『共感』に結びつく」という部分から類推できる。
- 問八 空欄の段落とその前段落から考える。
- 問九 問八同様に、空欄の段落とその前段落から考える。
- 問十 この空欄の段落とその前後から考える。また、この文章の全体を通じて、「詩」について書かれていることを読み取れるか、をたずねた問題でもあるので、そこから正解を導き出すことも可能である。
- 問十一 慣用句・ことわざの問題。故事成語や四字熟語など、幅広い知識を持つように勉強しよう。
- 問十二 文学史の問題。これも問五と同様に、消去法で考える。
- 問十三 この空欄を含む段落を中心に、それまでの流れから考える。
- 問十四 Aは接尾語がついた名詞（派生名詞）となる。派生名詞や転成名詞は動詞や形容詞と間違えやすいので気を付けよう。Bは名詞（代名詞）と間違えやすいので注意。
- 問十五 全て読み問題であるが、難解なものも複数出題した。読み書きは大学入試や就職試験でも問われ続けるので、しっかり勉強し続けよう。

【二】

- 問一 A「つゆく打消語」で「まったくくない」なのでA、B形容詞「心もとなし」の意味①じれったい②不安だ・気がかりだ③ぼんやりしているのうち選択肢にあるのは②不安だ¹頼りないのE、C「いかなる」は「どのような」、「にかりけむ」は「くだったのだろうか」、この二つが表現されているのはイ。
- 問二 a「かう・さう・たう…」にある「au」は「こう・そう・とう…」。「no」と読む。同じく「みやう」=「myau」の中の「au」も「no」に変えると「こうみょう」となる。b文中にある動詞「行ふ・習ふ・嫌ふ・負ふ」の「ふ」はすべて「う」と読む。
- 問三 ①「敦行は手綱さばきの悪い馬も全く苦手としない。」という文なので主語は敦行。②「宮城は走るのは速かったけどとても暴れるので…」という文から考える。
- 問四 「かくてこそは行はめ」は「このように乗るべきだ」という意味。「このように」が指すものは、本来は前の文中にあるが、ここでは直後に「いかなる手にかかりけむ」（どのような作法だったであろうか）と続き、その後その様子が述べられている。
- 問五 「さも疑はれたる」の二行前に「と人疑ひける」とあるので、その直前の「」の内容を、すでに解答用紙に記入されている前後の部分もヒントにしてまとめる。
- 問六 係り結びの法則が働く箇所には「ぞ・なむ・や・か・こそ」という係助詞が存在する。傍線部分には「ぞ・か」が用いられており、あと一つには「なむ」が用いられている。
- 問七 ア兼時は「悪しき馬に乗る」のは「心もとなし(不安)」であった。イ宮城は「極めて走りは疾かりけれ」とある。ウ「負馬渡すことは習ひも無く」とある。エ〇。オ敦行は「進退に賢き馬」に乗っていた。
- 問八 ア「徒然草」、エ「平家物語」、オ「方丈記」はすべて鎌倉時代、ウ「奥の細道」は江戸時代、イ「枕草子」と「今昔物語集」は平安時代の作品。

【現代語訳】

今は昔、右近の馬場（ウマバ）において競馬（クラベウマ）が行われた時、第一番の組に尾張の兼時と下野の敦行とが乗った。兼時は競馬の騎手としてとても優れた名手であった。昔の名手に全く恥じることのない、すばらしい騎手である。但し、荒馬に乗ることに関しては、少しばかり頼りなかった。敦行は荒馬であつても少しも苦にせず、中でも鞭競馬（ムチクラベウマ）ではとても優れた名手である。

その日の競馬では、敦行は手綱さばきに優れた馬に乗っていた。兼時は、宮城という有名な暴れ馬に乗っていた。この宮城という馬は、大変走るのは速いがひどく暴れるので、兼時の乗る馬としては全く不適であつたが、何か思うところがあつてか、その日の左方の第一番としてこの宮城を選んで乗ったのである。

さて、すでに三度の足慣らしが終わり、互いに触れ合うように乗り、走らせた。この宮城は、いつものように、まるで手玉を取るように跳ね上がるので、兼時はふだんの素晴らしい競馬の技を発揮することが出来ず、ひたすら落馬しないようにするばかりで、どうすることも出来ずに負けてしまった。

競馬には、二人一組で乗る時から、勝ったあとの乗り方まで多くの作法がある。しかし、負けた馬の退場方法には、これといった先例はなく、作法を少しでも知っている人はいなかったが、その日兼時が負けたあとの乗り方を見て、すべての人は、「たとえ完敗しても、そのあとはこのように乗るべきだ」と感心した。どのような作法だつたのだろうか。すべての人に、「まことに気の毒だ」と思わせるような姿をして乗って行つたのである。ということは、「兼時は、『負け馬に乗る作法をすべての人に見せてやろう』と思い、わざと宮城に乗り、このように負けたのではないだろうか」と人々は疑つた。これから後は、身分ある者も近衛舎人も、負け馬に乗る作法はこうするものだと思つたのである。

実際のところ、このように疑われたのは当然である。兼時は、暴れ馬で跳ね回る馬に乗ることは苦手なのに、わざわざ宮城を選んで乗つたというのが不審である。従つて、その日兼時は自ら進んで負けたのだと言つて世間の人は皆褒めたたえた、と語り伝えているということだ。

【三】

問一 四字熟語の問題。特に⑤は難度が高いが、国語便覧に書いてあるものだけでなく、読書などで出てきたものは、しっかり意味も含めて覚えていこう。

問二 文学史の問題。作者と代表作だけでなく、時代の流れとともに、思潮も合わせて覚えていこう。なお、ウは夏目漱石など、エは森鷗外など。カは古井由吉や後藤明生、キは小林多喜二や葉山嘉樹ら、コは島尾敏雄や梅崎春生などがあたる。